

●ムサビに入ったきっかけは?
●高校の頃から一応プロのスタジオ・ミュージシャンとして仕事を始めていて、大学に進む気持ちはあまりなかったんです。中学・高校と立教で、そのまま大学に行ってしまうの?なんて思っていて。姉が始めていた洋服のデザインの手伝いもしていたし、気持ちはもうプロだったんですね。でも、両親からは「大学にだけは行ってくれ」と言われて、どうしたものかなあと考えていたところに、バンド仲間の小原礼が「ムサビに行かないか」と誘いに来たんです。後に一緒にサディス



●プロフィール/高橋幸宏(たかはしゆきひろ)
1952年東京生まれ。
高校在学中よりスタジオ・ミュージシャンとして活動始める。
1972年サディスティックミカバンドに参加。
1978年細野晴臣・坂本龍一と共にイエロー・マシク・オーケストラ(YMO)を結成。内外の音楽界に圧倒的な影響を残す。
1983年「散開」。
1993年再生し、アルバム「TECHNODON」を発表
78年以降ソロ活動を開始。
その一方で鈴木慶一とのユニットであるTHE BEATNIKSとしての活動やファッションデザイナー・山本耀司のバリ・コレクション用音楽制作、椎名誠の監督映画作品の音楽監督などコラボレーションの活動も活発である。プロデューサーとしても内外を問わず数多くの作品に参加。
1986年公開の映画「四月の魚」大林宣彦監督では、主演・音楽をつとめる。エッセイ集も「犬の生活」「ヒトの休日」を上梓し、書き下ろし小説「キャッチ&リリース」(大栄出版)を発表。YUKIHIRO TAKAHASHI COLLECTIONブランドを核とした、ファッションデザイナーとしての一面をもつ。趣味は釣り。最近ではフライ・フィッシングに熱を入れている。2002年9月細野晴臣とスケッチショウのバンド名でCDをリリース。また、「キャッチ&リリース」の続編執筆中。

インタビュー●高橋幸宏/聞き手●高橋章子

コンプレックスは誰もが持っているし、感じているならダメ。音楽作るのは穴(痛み)を埋めるため。——高橋幸宏

ティック・ミカ・バンドに参加することになる小原君は僕の一年先輩なんですが、その頃からふたりでいろんなバンドやセッションに参加していて、彼はその頃一浪中だった。で、デザインの勉強をしておくのも悪くないかな、なんて感じて、受けたわけですね。

●どこの科でしたか。

●生活デザイン科だったかな。ムサビといえば、故・景山民夫氏も行ってましたね。彼は僕のすぐ上の兄の同級生で、慶應からムサビに行っていて、しょっちゅう家に入出入りしてたんです。中学から高校生くらいだった僕が、彼から受けた影響は大きいです。ムサビに入ろうと思ったのも、どこかにその影響があったのかも知れませんが、まじめに通っていたのは最初の一年くらい。大学で教えることってあまりにも基礎的なことでね、僕が知っていることしか教えてくれないし、絵がうまくなくて入ったわけじゃないからね。かといって、何をやるかってこともなかったけど。

●高橋(章)もそうなんですよ。油絵やろうと思って行ったわけではなく、自分探したかった。

●在学中にサディスティック・ミカ・バンドに参加して、忙しくなってくると、学校にはほとんど行かなくなってしまっ。授業で一番まじめに出たのは体育(笑)。中学・高校とサッカー部だったからサッカーを選んで、僕以外は初めてやるようなやつばかりだったから、コーチ役として教えていましたね(笑)。思い出といえば、それと鷹の台ホールかなあ。小原や一つ上の先輩の伊藤(某化粧品会社社長の息子)、それから同級生の女の子やその子たちがつき合ってた建築科の人なんかと、よくホールに集まっていた。あとは19才で府中の自動車教習所へ学校帰りに通っていて、よく小原が迎えに来てくれたり伊藤が送ってくれたりした、そんなことくらいですかねえ。だから、熱心だったのは1年くらいですよ。もう仕事していたから、課題の多いのがおっくうでねえ。

●ムサビに行った意味はありましたか。

●それはあったと思いますよ。何やっていいかわからなかったけど、少なくとも好きなことやっていると実感はあった。それで、「これじゃないな」ということが分かっただけでも意味があったんじゃないかな。学生のタイプもさまざまで、早稲田のパンカラみたいなのもいれば、学生運動に傾倒していたり、思想や、アートのことなん

かで激論を交わしていたりする。結構青いというか、すごくまじめで硬派な人も多かった。もともと僕はノンポリでしたけど、そのまま立教大学に行っていたら、ただのノンポリなやつになっていて、世の学生たちの中にはそういう人たちもいるということ、肌で感じないまま、中退していたでしょうね。

●デザインも音楽も、根っこに流れている共通点は何?

●僕の場合は、僕の育った「高橋家」、そのものだと思います。姉はファッション関係の仕事をし、兄はプロとして音楽をやっていて、5人兄弟の末っ子だから、やるのがあたりまえと思って育った。

●家系的にそうだと、それに対抗するために違う道行こうとは考えませんでしたか?

●あまりにも偉大だったりして越えられないと、そういうことはあるのかもしれませんが。僕は選択肢が2つあって、そのどっちにも興味があったということ。

●挫折したことは?

●食っていけないかもしれないと思ったことはないです。そのときどきに自分が携わっている音楽や仕事に対する葛藤はあったとしても。

●才能だけではなくて、触発されるお友達にも恵まれていますね。

●細野(晴臣)さんとの出会いも偶然で、高校の時に軽井沢でのダンス・パーティーで知り合ったんだけど、そうした上の世代の影響がちゃんとあった時代で、それに触発されて自分が見えた、ということがあってと思います。と同時に、同世代(昭和26、27年生まれ)の小原礼をはじめ、坂本龍一、高中正義、大貫妙子、矢野顕子とかがいる。周囲にいい見本がいっぱいあって、団塊の世代の中心には兄がいて、直接そういう人たちと一緒に仕事できたことが一番大きかったですね。今年50才になりましたけど、この世代のように、ある層の厚さをもってちゃんと第一線で音楽やっているというのは、今まで無かったことじゃないですかね。やっとそういう時代が来たなという感じがします。

●ムーンライダーズの鈴木慶一さんとの対談で、音楽作るのは穴埋めみたいと言っていましたか…。

●穴というのは、つまり痛みです。傷ついたことのない人間なんて信じられないと思うけど、今そういう人が多いような気がします。あるいは、そ



AUDIO SPONGE SKETCH SHOW/9月19日発売
 カッティングエッジCTCR-14224/全12曲/3,059円(税込)

の痛みの深度が浅いというか。コンプレックスのないやつなんていないはずだけど、それをわかっていないやつも多いんじゃないか…。コンプレックスを自覚すること、そこで見つけた穴ほこを埋めるために、僕たちはずっと何かを作り続けると思うんです。ただ、そう言いながら、僕たち東京生まれは、コンプレックスをばねにして、といった根性論というのは、嫌い、というかそれをオモテに出すことは気がひけるんですね。ひ弱なくせに自己主張は強くて、でも、「俺、俺」とは言いたくなくて、斜に構えていたがるという…。その典型が僕であり、ビートニクスの相棒、鈴木慶一なんです。去年の8月に慶一と14年ぶりくらいにビートニクスのフル・アルバムを出しましたが、また何年か経って、ふたりの気持ちが一致した時に、穴埋め作業をやるという感じですかね。

●新しいものをキャッチする方法は?

●今やっている細野さんとのバンドにしても、最初はどなるかと思っていましたが、一緒にスタジオに入ってやっていくうちに、不思議と「これだー!」というものが見つかってきて。パーマナント(永久的)なグループにしようなんて思っていないところから始めたんですけど、お互いに触発されて、来年の年明けにはもう次のCDを出そうなんて言いあってる。やっぱり僕の場合はアーティスト同士の化学反応ということでしょうか。



それによって文字通り「化け」たり、新しい何かが入り張りあうんです。

●潜在的に感じていたものを引き出すには?

●引き出してくれるにはリスペクト(尊敬)と信頼がないとダメで、ふり返れば、YMOの出会いというもの、そもそもそうでした。他のメンバーふたりからは「幸宏が一番YMOを変えたよね」と言われるんだけど、僕はYMOに変えられたと思う。「ライディーン」といった曲が売れていた時もあったけど、直後の「BGM」というアルバムではその流れをあっさり断ち切ってパーンと新しい次元に移行した。でも、メーカーをはじめ誰からの制約も受けず自由にやらせてもらえて。もちろん背景には教授(坂本龍一)の才能と細野さんのプロデュース力があってたわけですけどね。当時のインタビューを読むとすごく屈折していて、「日本だけで100万枚越えてしまうということは、僕たちはひょっとしたら好きなことをやっていないんじゃないか」なんて言っている。それほどマスコミを信じていないわけです。それで、僕たちは裏切ることに進むわけ。「BGM」というアルバムで一位にならなくなって、でも、本人たちはその方が充実している。辞めることを前提に歌謡曲みたいなヒット曲を出そうということで作ったのが、「君に、胸キュン。」だった、とかね。3人のメンバーに次ぐ第四の化け物のYMOという生き物がいて、それが3人の思いと違う方向に動き出してコントロールが出来なくなっていったことに強烈な違和感があって、それをつぶす方向に動いていった。ローリング・ストーンズ、ビートルズも同じだったといいますが、そこで何とかコントロールしようとしたら、あるいは売れることで命脈を保とうとするか、切り捨てて次に向かうかという選択に迫られる。僕たちは後者を選びました。切り落として一から違うモノを作る道を選んだんです。

●最近いい子いますか。

●今、僕と細野さんの興味は「音響系」や「エレクトロニカ」といわれる音楽なんですけど、知り合いの中学生の中には、その音響とか、音の響きといったものについて、僕たちと対等に、普通に話ができている子がいます。僕たちよりもいろんな音楽を聴いてますし(笑)。

●若くて、人間性はただだけど、未完成の方が面白いわけですね。

●20代、30代になるとミュージシャンも守りに入る傾向があります。売れた人も、売れると自信はつくけど、いつまで続くのかという不安感から守りに入ってしまうんですね。そうすると、どうしても面白みは薄くなってしまいます。

●忙しすぎて、ストレスたまりませんか。息抜きは?

●今は、フライ・フィッシングに夢中です。酒を飲みながら毛鉤作ったりして。自分の作った毛鉤で釣れたりするのって、すごく楽しいですよー。

●自然の中になると、健康のバロメーターになる。

●川って、何キロも歩くわけ、途中でへばって参ったら、「魚釣りも楽しめないのかー」て思ったりしてね。今はキャッチ&リリースするようになって、いろんな社会問題も見えたりする。タバコのポイ捨てもしなくなりました(笑)。

●今後の活動は?

●小説を仕上げなくてはいいないんです。以前出した「キャッチ&リリース」(大柴出版)の続編なんですけど、今一番悩んでることですね。4年前の3月に出ることになっていたのが…。構想はできているんですけど、何か面白くなくて(笑)。それから、9月19日にスケッチショー(高橋幸宏&細野晴臣)のCDが発売になって、年末に東京と大阪でコンサートがあります。細野さんが「バンドは一枚で終わってはいけなから、次のアルバムも来年中にはやってみようか」と言ってます。ユニットというユニットバスが連想されるし(笑)、クールな感じがして、すぐやめてしまいそうだから嫌、というのが細野さんの意見。

●学生に一言

●YMOの頃に「好きなことやっていいですね」とよく言われたけど、僕はずっと「薦めない」と言っていた。例えば音楽だったら、大好きな曲を何回も聞いて、解剖し、研究し、を繰り返していくうちに、だんだん好きじゃなくなっていくんですね。でも、それをやらなきゃならないのがプロ。洋服の場合でも、他人の服を見るとすぐに触って素材を確かめる癖がついたり、どんなブランドのどんな服も、その裏側がわかってしまうようになると、洋服のファンではいられなくなっちゃう。「お薦めしません」は、そういう意味だったんです。でもね、最近は逆に「好きなことやる」といっています。好きなことを見つけられていない人が、あの時代よりも多くなってるんじゃないかという気がするんです。まだ何も始める前から、

20代そこそこで「好きなことで、飯が食えるわけがない」と決めつけちゃっている人も多くなってるようにも思うんですね。

●「好きなことはちゃんとやって行け」ということですね。

●ただね、好きなこと見つけたと思っても、違うと思ったらすぐやめるべき。時間の無駄です(笑)。

●お友達紹介していただけますか。

●鄭東和君なんかはどう。鄭東和君はこのスケッチ・ショーのアルバムも手伝ってくれていて、彼は短大のグラフィック科を卒業しているんじゃないかな。建築家で弟の鄭秀和君でもいいし、彼、東芝の家電のデザインをやっているよね。

●インテンショナルリーズという建築家集団ですよ。この間記事読みました。今日はありがとうございました。

〈インタビューを終えて—編集事務局〉

9月5日渋谷のとある音楽スタジオで、はじめて見る機材を横目に用意して下さったVIPルームにてインタビューがはじまり、YMOのフアンとしては、「ライディーン」を演奏するシーンが盛り、カメラを持つ手も振るえました。純粋に自分たちの音楽をやりたいために、YMOを解散したこと、今尚、新しい音楽に挑戦している高橋幸宏さんは根っからのクリエイターなんだと感じました。

インタビュー第1弾～第3弾は
 ホームページでもご覧になれます。



●聞き手/高橋幸子(たかはしあきこ)
 1952年東京生まれ。'75年武蔵野美術大学別科実技専修科油絵専修卒業。'77年卒業後入ったビックリハウスにて編集長として活躍。'85年高橋幸子事務所設立、各種イベントの企画・制作。また、エッセイの執筆や講演、テレビ、ラジオ、雑誌などでも幅広く活躍中。
 ●主な著書/「ひとりっ子が読む本」三笠書房、「大出産」徳間書店、「ビックリは忘れた頃にやってくる」筑摩書房、等。'01年武蔵野美術大学校友会企画担当副会長として活躍中。

デザイン材料/製図器具類/洋画材料
株式会社 土井福